魔界水滸伝6

栗本薫

KADOKAWA NOVELS

世界に蔓延しつつある難病も地球外生命の侵略の結果だった！日本最大の財閥が握る秘密とは？伝奇SF巨編・第六弾。

カドカワノベルズ

昭和五十八年十一月二十五日初版発行
昭和六十二年一月二十日十版発行

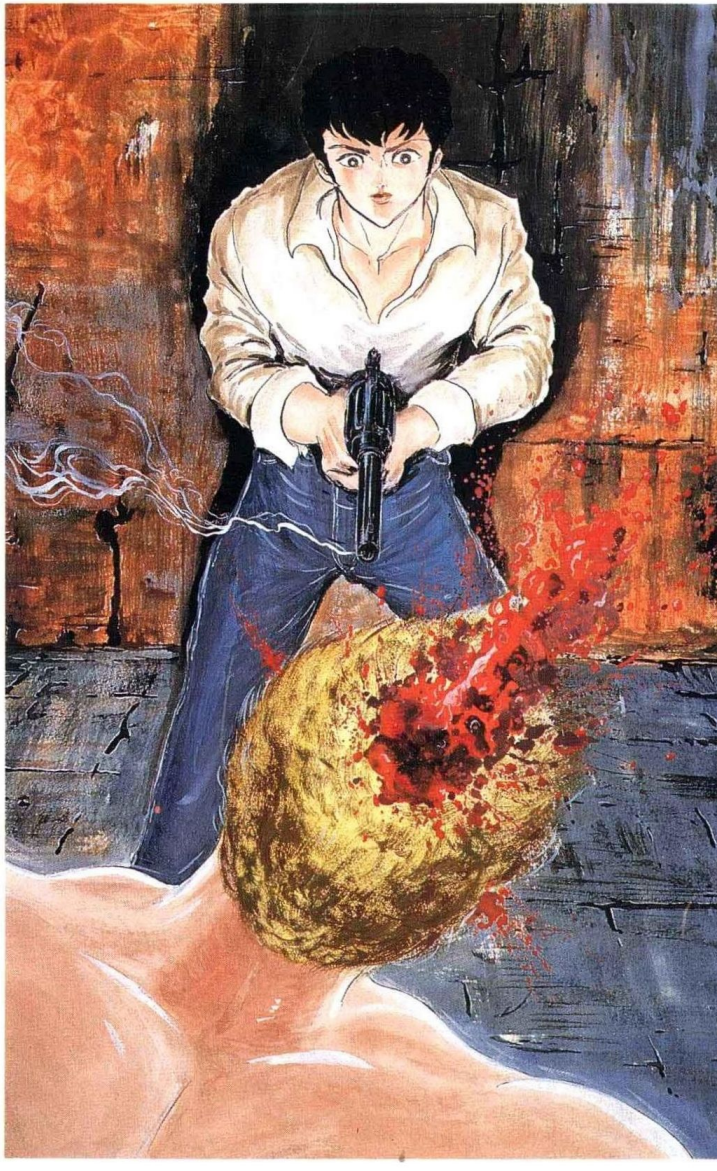
著者　栗本薫
発行者　角川春樹

魔界水滸伝 6

印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社宮田製本所
装丁者　岡村元夫

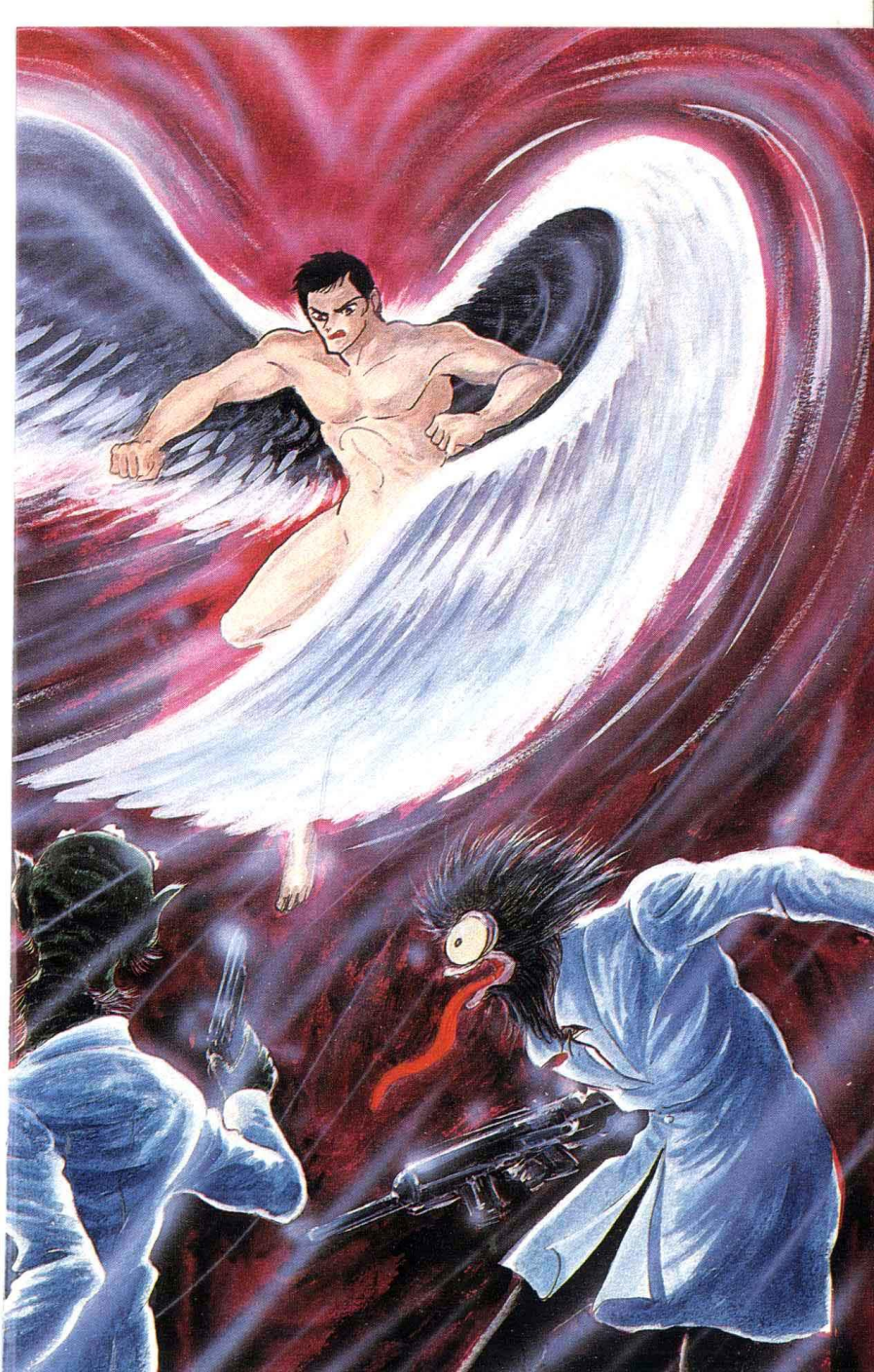
発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二-一三
〒一〇二　電話　営業〇三-二三八-八五二一　振替東京三-一九五二〇八
編集〇三-二三八-八四五一

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします
ISBN4-04-770906-9　C0293



悲鳴とも、獣のうめきともつかぬわめき声をもらして、涼は引金をひいた――至近距離であびせられたマグナムの弾が……（本文 第二十六章「狂った夜」より）

◀炎の中で踊りくるう、妖怪変化どもの群れ――それは古いむかしの絵にみる、百鬼夜行の図そのまま……（本文 第二十七章「神話」より）



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

ほっそりした、白い、かよわげな——どこか処女の初々しさを漂わせる可憐な裸身——美しかった。(本文 第二十七章「神話」より)

KADOKAWA NOVELS

魔界水滸伝6

栗本 薫

〜絵・口絵・本文イラスト／永井豪

魔界水滸伝6　目次

第二十四章　熱気　プロローグ　11
熱気　1　13
熱気　2　24
第二十五章　神話　1　38
神話　2　47
神話　3　63
神話　4　74

第二十六章　狂った夜　1　88
狂った夜　2　101
狂った夜　3　114
神話　5　120
神話　6　139
神話　7　151
第二十七章　神話　8　165

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

神話 11 203
神話 10 190
神話 9 178

第二十四章

熱気　プロローグ

暑い。

とにかく、暑い。

じっとうごかずにいてさえ、じわっと、脂のような汗がしたたってくる、そんな暑さである。尋常一様の暑さではなかった。

もう、暦の上では、とっくに秋になっていてよいときである。いや――場所によっては、もはや、そろそろ冬支度をはじめることさえ考えていたかもしれない。

にもかかわらず――

ここ――ニューヨーク、マンハッタン島では、連日、四十度ちかいという、異様な暑さがつづいていた。異常気象――というもおろかな、異常現象である。

この夏の暑さは、合衆国の各地で猛威をふるい、クーラーをもたぬ貧しい階層の、老人や子供を中心に、かつてない大規模な、暑禍の被害者が出ていた。

ニューヨーク周辺だけでも、この炎暑による死亡者は、何百人という尋常でない数にのぼるのである。クーラーをもたぬためや、停電でクーラーのきかなくなったための、直接の死者だけでなく、この暑さで体のよわったための病死まで考えにいれたら、いったいどのくらいの数にのぼるものか、見当もつかない。

しかも、それは、秋風の立つころになっても、いっこうに、衰えることを知らぬのだった。例によってハーレムでは暴動が何回かおこり、特別の警戒網がしかれた。しかし、当局の懸念ほど、暴動がこの

暑さとともにエスカレートし、拡大してゆくことはなかった。あまりにも、今年の暑さはケタはずれでありすぎた。それは、暴動をおこす気力をさえ、人々からうばい去ってゆくほどのすさまじいものだったのである。

ともかく、異常な暑さであった。まるで、地球という、この惑星そのものが、狂いはじめ、ゆがみはじめてゆくきざしでも、あるかのように。——この惑星自体が、おのれの上にゆっくりと迫りつつあるあやしい変貌、変動のときの予感に、身をふるわせ、よじっておののき、怯えているとでもいうかのように。

それは、人びとに迷信的な恐怖をさそうような異常さであった。ことに、その暑さが、秋になってもいっこうにおさまるきざしさえみせぬことが、いっそう、人びとの心をさわがせた。

例によって例のごとく、こうしたときには、その災厄に乗じてひともうけをたくらむ連中があらわれる。——氷、つめたい飲み物、水枕、いかがわしい冷却機、アイス・ボックスのたぐいを売るものが急増した。また、地球の終末と信仰の勝利を説く坊主ども、この異常気象は惑星直列のせいであると書いた本——

いまや、ブロンクスの通りは、まっ昼間に出歩いて熱射病にかかりたいものなど誰もいなかったため、さながら墓場同様にしずまりかえっていた。歩いているものはほとんどいない。むやみと、強盗と殺人の件数だけが増加して、その死の町のようなニューヨークを、けたたましくサイレンの音をひいてパトカーだけがかけぬける。

暑い。

とにかく、暑い。

異常な暑さであり、生きながら焙られるフライパンの上にいるような——《地獄よりも熱い》と人々の言うような熱気であった。

ちょうど、これまで目にみえぬ水面下だけでじわ

じわと進んでいたカタストロフが、いよいよ活火山と化して、表面へ噴出してくる、そのための秒よみでもあるかのように。——

熱気　1

暑い。

じわじわと焙り焼かれているような、じっとしていても、動いても、逃れるすべのない暑さ。——足もとから、熱が生き物のようにおそいかかってくる暑さ。

が——

田舎の方では、毎晩のように、暑さで死んでゆくものがあとをたたぬというのに、マンハッタンの中心部は、さすがに少しもそんな異常におびやかされてはいなかった。

昼も夜もまわりつづけ、最大出力でうごきつづけるエア・コンの、しずかな音だけが室内にひびいている。

その室内は、快適な二十二度ジャスト、心もち肌寒いくらいに保たれ、そして、広々とした室の中に、見わたせば目に入るのは、豪奢で金のかかった、特別の調度ばかりであった。

すばらしい革張りの椅子、一枚板のオーク材を用いた巨大なベッド、ミノッティのサイド・ボードの上に飾られた水出しコーヒーのセット。

ホーム・バーにはありとあらゆる高価な酒がそろっており、大理石のサイド・テーブルの上の小箱には最高級の葉巻が入っていた。むろん床には毛足の長いペルシアじゅうたんがしきつめられ、壁にはほんもののレンブラントが二、三点かけられている。

室の隅にかくされたいくつかの機器が、室の温度を一定に保つだけでなく、快適な湿度を保ち、そして、かすかな芳香を空気におくりこんでいた。この室の中にいるかぎり、おそろしく静かだった。四十階も下の通りをかけぬけるパトカーのうなりも、と

きたまの銃撃や叫び声も――一切はこの室内には無縁である。

ここからでは、むろん、見るすべはないが、この巨大な高層ビルの入口に、小さな二つの札が出ているのを、この室の住人は知っていた。入るとき、見たからである。

上の方のそれには、

「Polaris Building」

とあり、もう一つのそれには、もっとずっと小さく、まがりくねった書体で、

「The Whole World
Self-defence-protection
of All Mankind」

とあった。

このあたりには、きわめて多くのコングロマリット、協会、委員会、あらゆる重要な活動の本部、商社から政府のそれまで、ありとある種類のオフィスがかまえられている。その中には、一国の政治の中枢の機能をつかさどるものから、ごくいかがわしい、えたいのしれぬものまでが入りまじっている。

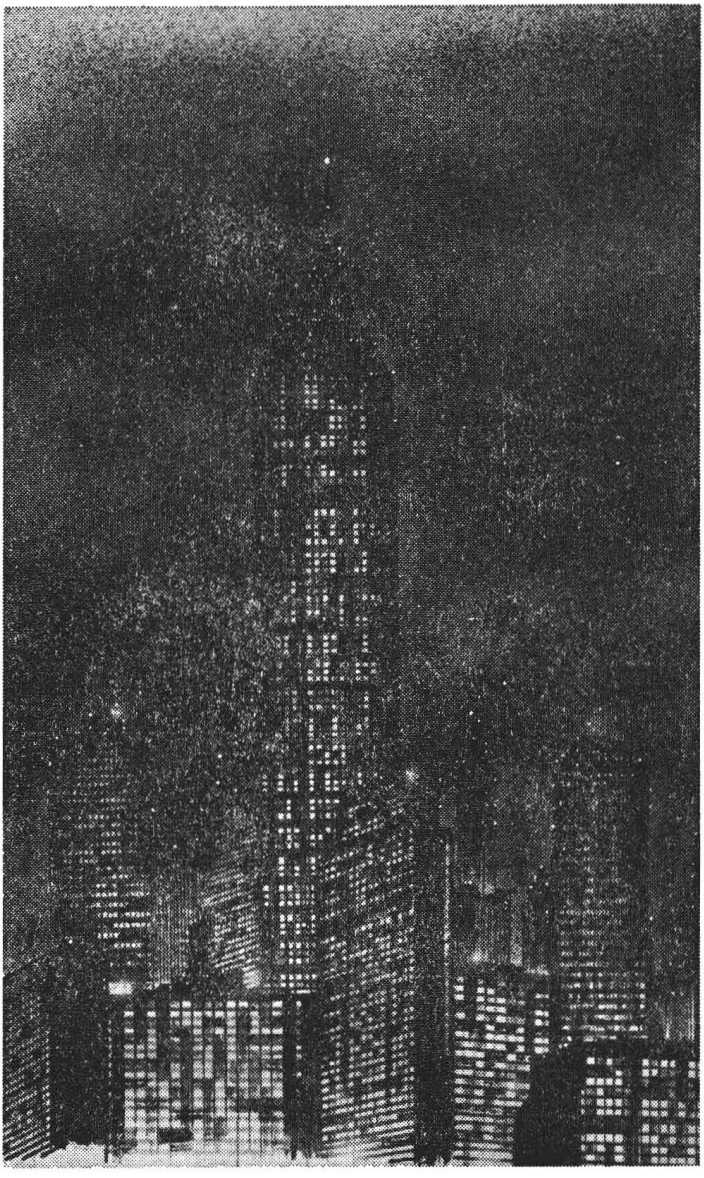
その、わけのわからぬ看板が何を意味するのか、知っているものは、ごく少ないはずである。

まして、その建物の中で、じっさいに何がどのように行われているかを、知っているものは――

四十階のスイートの住人は、そんなことをぼんやりと考えめぐらしながら、ローズ・ウッドの大きなベッドの上からおり、のろのろと、窓ぎわへよって下を眺めた。

立ちのぼる連日の熱気も、人々の苦悶も、このみがきぬかれたガラスの内側へとどいては来ない。はるか、川の上空に、小っぽけな虫のように、市警のヘリが飛んでいるのが二機、見えたが、そのプロペラの轟音もむろんきこえない。ただ、しずかなエア・コンディショナーの規則正しい呟きだけだ。

かれは、ぼんやりと立ちつくし、くるぶしまで埋まるほど毛足の長いじゅうたんを素足にふんで、呆



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.